

# 河野一族と『予章記』

2025年3月1日（土） 於：横浜市開港記念会館 2階6号室

## はじめに

瀬戸内の海賊(水軍)というと、有名なのは戦国期の村上水軍だろう。しかし、鎌倉時代初期においては、伊予国(現在の愛媛県)では河野氏の水軍が勢力を築いていた。

この伊予河野氏は今でこそ有名ではないが、伊藤博文が末裔を称するなど、歴史(由緒)のある一族であるといえるだろう。

この河野氏が編纂した『予章記』というものがある。今回は、この『予章記』に描かれたエピソードを中心にしながら、河野氏を紹介する。

## 『予章記』

河野氏が氏族の来歴を記したもので、14世紀(室町時代)に成立したとみられている。

神代からはじまり、平安期・鎌倉期を経て南北朝時代・室町時代までを網羅し、伊予の『古事記』であり『平家物語』であり、室町の現代史ともいえる。

内容については、神話伝承や文書(偽文書含む)・文献の引用、創作が混然一体となった不思議な歴史叙述書である。いくつかの異本が存在する。

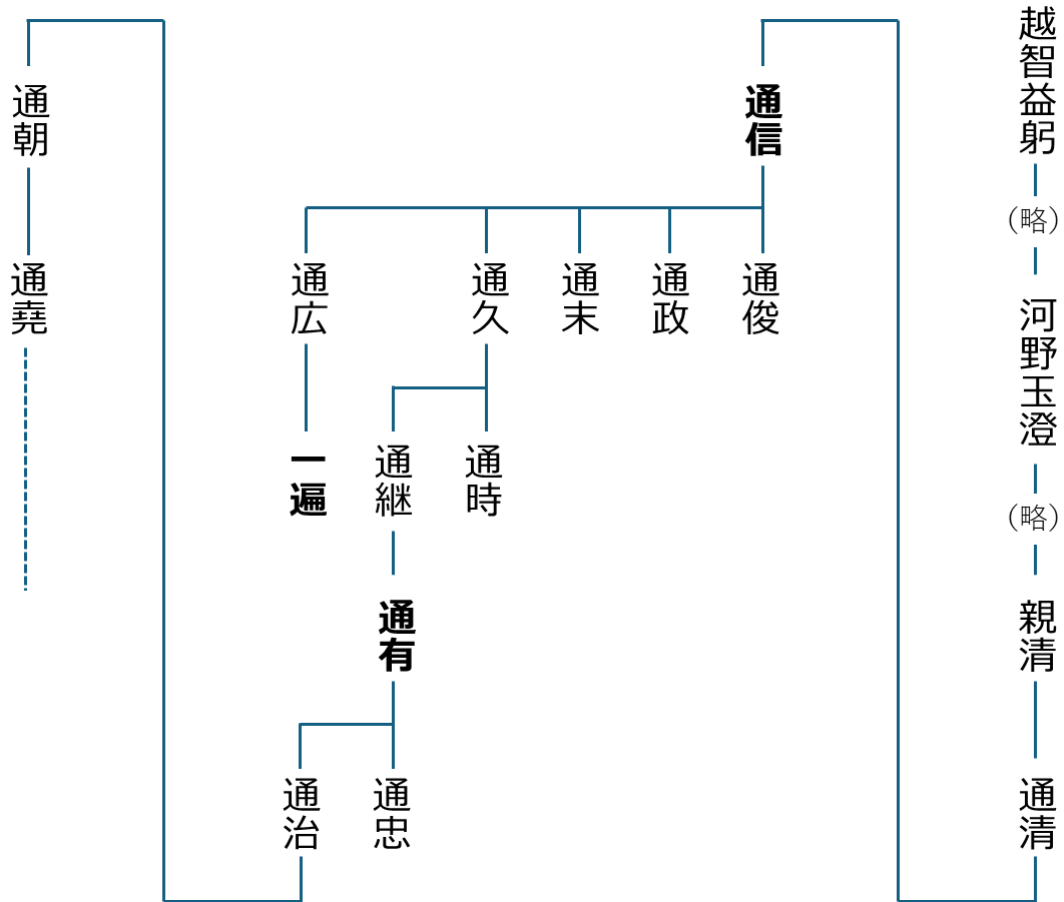
## 『河野氏』

伊予国(現在の愛媛県)の有力豪族である越智氏の流れを組む。河野郷(風早郡)を根拠地とするが、室町時代以降は湯築城を居城とした。

現在は「こうの」と読むが、蒙古襲来絵詞などで「かはの」とルビがふられているため、本来は「かはの(かわの)」の読みが正しいと考えられる。

根拠地は風早郡河野郷であり、通信のころは高縄城にいたとみられるが、室町時代以降は湯築城(ゆづきじょう)に移住した。

## 【河野氏略系図】



### 越智益躬（小千益躬）（おちのますみ）

『予章記』いわく、孝元天皇（第8代）の弟である伊予皇子の子孫とする。  
 『日本往生極楽記』や『今昔物語』などにも名前が見える。  
 『一遍聖人絵伝』においても、一遍の先祖として名が挙がる。  
 『予章記』のなかでは鉄人退治の話が載っている。

### 河野玉澄

伊予国風早郡河野郷（現在の愛媛県松山市）に居を構えたことから河野玉澄とも称し、河野（かわの）を名乗った初代ともされている。

### 河野親清

河野親経には女子一人しか子がいなかった。そこで、清和源氏の正統（予章記曰く）である源頼義が伊予の国司として在国していたときに、頼義の末の子である親清を婿として迎え、河野を継がせた。※頼朝の親戚という主張か？

（頼義→義家→為義→義朝→頼朝）

## 河野通清

親清にも子供ができなかったので、妻（親経女）は氏神である三島明神にて祈禱をしたところ、明神は「親清は源氏の血筋なので河野を継がせてはならない」といい、十丈あまりの大蛇となって妻の夢枕に立った。妻は豪気な女であったため少しも動じず、その後、男子が一人生まれた。

これが通清となる。身の丈が八尺あり、身体には鱗があり、背に溝がなく（？）前かがみであった。

※いわゆる異類婚姻譚

河野一族はこれより先「通」の字を通字とするが、その故は「明神一夜密通ノ義ヲ以テ」かつ「即大通知勝ノ理顕然タリ」とある。

※大通知勝 = 大通智勝仏 = 大山祇神の本地とされる

頼朝が兵を挙げるとこれに呼応し源氏方として挙兵したものの、平家方に攻められて討死する。

## 河野通信（1156～1223）

通清の子。父の死後、ゲリラ戦を展開し、周囲の平家方と戦い続ける。義経が四国へ渡ってくると、通信は軍船を率いて屋島に向かい源氏の麾下に加わる。※同じ時期、田口（栗田）氏（※平家方の有力武将）に本拠地を攻められているが……。

戦後は御家人として列席し、北条時政女を妻にもらう。※時期は不明。真偽も不明。（時政女の嫁ぎ先→畠山重忠、平賀朝雅、三条実宣、宇都宮頼綱、坊門忠清、河野通信）

1189年、奥州合戦に参戦。基本的には鎌倉に住んでいたもよう。

頼朝死後は梶原景時の弾劾状に名を連ねる。その後、北条時政の失脚にともない、牧氏事件に加担したとして宇都宮頼綱と同じように謀反の疑いから出家したか？

※諸説あり

※当時、伊予守護は宇都宮頼綱？

※『吾妻鏡』承久元年九月二十二日条に河野四郎とあり、承久三年六月二十八日条には河野入道とある。

『承久の乱』では宮方で参戦したが『承久記』いわく通信と息子たちは広瀬に出陣したということなので、おそらく決戦に挑むことなく帰国し、高縄城に籠城のち捕らえられ、奥州平泉に配流された。

**鎌倉時代の初期において、河野通信は西国の御家人でありながら頼朝と直接主従関係を結んだ数少ない御家人のうちの一。その中でも、鎌倉に住し時政女を嫁にするなど有力な東国御家人と比肩する地位にいたのは河野通信のみといってもいいであろう。**

※ほとんどの西国御家人は、各地の守護を通して頼朝と主従関係を結んでいる「国御家人」

## 予章記における河野通信の描写

童名を若松丸とする。

治承・寿永の乱に関しては、『平家物語』をひいて語られる。

- ・父の仇である西寂を討つ→『平家物語』巻六「飛脚到来」
  - ・屋島合戦における活躍→『平家物語』の屋島合戦関係の部分
    - ※「通信、三拾艘ノ兵船ニテ勝浦へ参リ」と加えられている。
- 『平家物語』などでは河野の登場は屋島合戦後・壇ノ浦合戦の前となるが『吾妻鏡』では元暦二年二月二十一日条に記載がある。

>>ココで書状の引用が挟まれる。

『予章記』のなかで、文書が初めて登場するのがここ。

※室町期において、家の系譜を書き表すときに、現存する書状をひいてきて書き表すといった手法が一般的であったらしい。

引用されている書状は偽の書状であるが、それに近い内容は『吾妻鏡』にも記載されている。ただし、『吾妻鏡』が河野氏の作成した偽文書を参考にしてしまっている例もあるのではないか

### 折敷に三文字の家紋の由来

頼朝が天下を静めたのち、鎌倉の由比ヶ浜で行われた酒席にて、頼朝は折敷に数字を書いて各人の前に沖、席次を決めた。通信は頼朝・時政に次ぐ三番目であった。その席次に異を唱える人はいなかった。（ほかにも由緒がのべられている）

### 承久の乱

通信が宮方についたのは、妻である時政女との不和が原因であり、また後鳥羽院の寵愛もひとしおであったからであると説く。三島明神は宮方の敗北を予見していたが、通信は引き留める三島明神のことを聞かなかつたため、それ以来、三島明神の声が聞こえなくなつたともとく。ただし、通信の選択は武士として間違っていないとも。

→一族の興隆の祖として、河野通信を偉大なるものとして書く

### 通信の弟の話

- ・河野五郎通経は義経を烏帽子親とした。
  - ・河野氏につたわる兵法に加え、義経の兵法も伝授された。
- ※室町時代には「兵書」が盛んにかたられていたため、筆者の室町人的意識が垣間見られる。
- ・その孫の繁昌は細川頼之が出家して四国へ下校してきたときに争つたが（1379年～1381年？）
  - ・惣領を恨んで細川の被官となつた。※惣領＝河野通堯？

## 通信の子孫の話

- ・嫡子は通俊（母・新居玉氏女）→通秀→通純（二月騒動で阿波国富田荘を給うを賜る）  
通村、信綱、通方
- ・通村の子の通綱は備後守であり元弘年吉野院御一統の時、通信の旧領をたまわり惣領になり、その孫も宮方についたが他国にて断絶
- ・次男通政（母・時政女）承久の乱では父とともに宮方。
- ・三男通末（系図によれば母は時政女か二階堂信濃民部入道女？）
- ・四男通久（母・時政女）は承久の乱のときに関東方として上洛し、宇治川の先陣をして阿波国富田荘を給う、のちに久米郡石井郷に申し替える。  
通信が流刑にされたけれども、北条の孫ゆえに家は続き、武名は絶えなかった  
通久の嫡子は通時、次男は通継である。

※本来はさらに通広という子がいる（一遍上人の祖父）

一遍上人絵詞では、自身が河野通信の子孫であるということがよく語られるが、『予章記』では触れられない。

ただし、南北朝時代に通治が一遍聖人建立の藤沢の道場で出家しようとする話が出てきており、その際にここは触れられることに……

## 河野通有と蒙古襲来

- ・通継の子、通有（六郎、母・井門長義女）対馬守に任じられる。
- ・弘安四年（1281）に蒙古襲来。大軍が押し寄せた。夷敵退治のことは家の先例がある※越智益躬の鉄人退治津島に進軍した。
- ・日本側は博多や筥崎に築地（防塁）を築き、馬を馳せられるように陸地側の傾斜は緩くして、築地の海側には逆茂木や乱ぐいをつけた。
- ・しかし河野の陣は築地の前に陣を構えた。（※河野の後ろ築地）
- ・後ろに逃げ道を作らないようにして、味方が逃げ出すことをおさえ、敵を引き入れて勝負をする意図である。

→『蒙古襲来絵詞にも河野通有は描かれている』

- ・通有の父、通継は本来は嫡男ではなかったが、兄の通時が父通久に義絶されたために惣領となったが、通時は納得しておらず、通有と通時のあいだでは訴訟があったが、蒙古襲来によりこの争論は収束した。

## 通有の子

- ・嫡子忠通（母・江戸太郎女）十四歳で父と蒙古の合戦に出て活躍した。  
→その子は通貞（母・別府七郎左衛門入道女）
- ・次男通茂（母・通久女）
- ・三男通種（母・通久女）  
→その子通時、建武年中に伊予国の大将として一族を率いて国中の凶徒を退治して玉生荘など給う。  
→通種次男通任は中先代の乱で投獄で討死に。
- ・四男通員（母・通久女）
- ・五男通為（母・通久女）
- ・六男通里（母・通久女）
- ・七男通治（通盛）（母・通久女）  
→1281～1364。『予章記』のなかで、最も長文で語られる。  
末弟にもかかわらず家督を相続し、『太平記』にも記された武勲を立てたにもかかわらず、北条方に属したために零落して出家し、その後一転して足利政権に属して故郷に帰るといふ波乱万丈の人生をおくる。

## 通治

- ・末弟であったにもかかわらず、通有の遺言によって家督を相続した。
- ・鎌倉幕府滅亡時には六波羅方（鎌倉方）だったため、困窮した。
- ・通治は無力極まったため出家遁世しようと思ひ相模国の藤沢にある清常光寺をたずねた。この寺は一遍上人の建立したものであった。
- ・一遍上人は通信の孫であり、河野のゆかりがあった。
- ・寺に行き、落飾の希望を当時の上人（安国）に伝えたところ、安国は「建長寺のほうがいでしょう」といって通治を建長寺に連れて行った。
- ・安国が南山和尚（建長寺）に通治を引き合わせると、南山和尚もこれを引き留めたが、通治の強い希望により剃髪させ、法戒名を善恵とした。
- ・そのころ、尊氏が建長寺にくることがあり、通治と尊氏は対面した。

※尊氏研究によれば、この時期に尊氏が鎌倉にいたとは思えず、通治と尊氏の出会い、尊氏が九州にいたころではないかということ。

- ・こののち、通治は帰国し、善応寺を建立する。

○ここから直義、尊氏書状、足利義詮書状など多数の書状を引用している

## その後

- ・通治の子（通時・通遠・通朝）
- ・細川頼春との戦い
- ・通朝、細川頼之と戦い死去
- ・通堯（みちたか）、恵良城に籠り戦う
- ・通堯、椿西へ
- ・通堯（通直）大宰府で懐良（かねよし）親王と対面
- ・正平二十一年の情勢
- ・正平二十二年の情勢
- ・正平二十三年の合戦
- ・正平二十三年閏六月から九月の合戦
- ・正平二十四年の情勢
- ・康暦（こうりゃく）元年十一月、通直（通堯）自害
- ・義満の安堵状
- ・亀王丸（通能）、鬼王丸、細川氏と和与
- ・北条多賀谷衆の安堵
- ・義満より御書
- ・通能（亀王丸）元服、義満との関係
- ・相国寺建立の際の軋轢
- ・通能（義）の重病、家督相続と義満書状
- ・通能（義）死去

河野通治（通盛）は足利尊氏に従い伊予守護職を手にしたが、河野通朝は細川頼之の侵攻を受け世田山城で討ち死にした。子の通堯は九州に逃れ、南朝勢力であった懐良親王に従い伊予奪還をうかがっている。幕府管領となった細川頼之が1379年の康暦の政変で失脚すると、通堯は南朝から幕府に帰服し伊予国守護となったが、細川氏の積極的な進撃に対し、弱体化して崩壊に瀕した河野氏の軍備によって、戦局の收拾をはかることは困難だった。

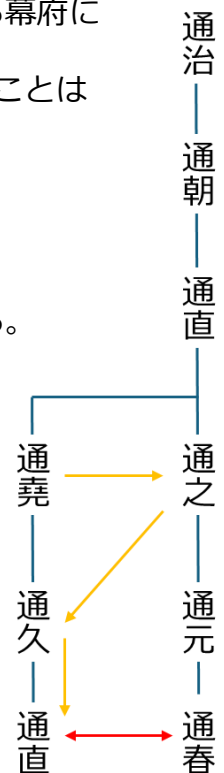
そのため足利義満は河野氏の保護にあたっている。  
いろいろあって一応両者は和睦する。

1394年、通堯が京都の屋敷で病に倒れると、弟の通之に家督をゆずる。

1406年、叔父通之から家督を相続した通久はのちに將軍義持から刑部大輔に任ぜられた。

義教は幕府における綱紀の粛正を断行するとともに、將軍の統率権を強化しようとはかった。守護大内盛見の権勢を利用して九州の統治にあたったが騒乱に発展した。

これをおさえるために、1435年、通久は幕命を奉じて大内氏とともに豊後国に出征したが、戦死してしまう。



その後、通久の子教通（伊予守護職）と通元の子通春とが対立し、通春が没落する。

このあとも家督争いが勃発し、河野家はますます衰退していく。

通直の子の通宣には子がなく、牛福丸を養子に迎えた。元服して通直と称し、兵部少輔・伊予守となったがこの子も病弱だった。

→このころ世は戦国時代

湯築城は秀吉に降伏し、通直は室が毛利元就の孫姫だったため、安芸竹原に移住する。

その後、通直の病勢は日に日に募り、1587年病歿。享年24歳と伝えられ、ここに伊予の名家河野氏は断絶したという。

## 参照文献等

○伝承文学注釈叢書 1 『予章記』 佐伯真一・山内譲 校注／三弥井書店

○戎光祥研究叢書 5 『中世河野氏権力の形成と展開』 石野弥栄

○愛媛県生涯学習センターデータベース『愛媛県史』

<https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/index/ecode:2>